



これからの 情報処理学会

— 第 20 回 —

実務家から見た情報処理学会

玉置 政一

(株)NTTデータ
情報処理学会財務担当理事

情報処理学会の正会員の数がここ 10 数年にわたり、減少の一途にあり、特に会員数が 100 名以上の大企業所属の会員数の減少が著しいことはすでに何人もの理事の皆さんが書かれているとおりである(特に、第 6 回の阿草理事の記事¹⁾に詳しい)。

こういう状況において、安西前会長は学会のあり方を「学術」と「実務」の両方に焦点を置くものに変えていくと提案をされ、佐々木新会長もその構想を引き継ぎ、より実質的な形にしていきたいと表明されている²⁾。

実務家向けの活動として、IT フォーラムの推進、連続セミナーの開催などの取り組みを行い、徐々にその成果ができていくところである。ただ、企業の実務家といってもかなり幅広く、研究者からさらに幅を広げていこうとするとそのニーズは十分につかめていない。

このため、本稿では、企業の技術者に対し、表-1にあるアンケートを実施し、その結果をもとに、実務家のニーズ分析を試みた。対象数が十分ではないが、今後、実務家向けの活動を推進していく上での参考になると考える。

実務家のニーズ

今回、弊社の主に技術開発部門^{☆1}の社員 23 人にアンケートを依頼した。

回答者のうち、48%が情報処理学会に加入しており、論文発表経験者は 13%というのが回答者のプロフィールである(図-1 回答者プロフィール)。以下にそれぞれの質問項目に対する回答を示す。

☆1 事業部門ではなく、技術開発を主なミッションとする部門。研究開発、技術評価、技術支援などの業務を行う。

- Q.1 情報処理学会を知っていますか？
 Q.2 情報処理学会の全国大会で発表したことがありますか？
 Q.3 情報処理学会の研究会で発表したことがありますか？
 Q.4 情報処理学会で論文発表をしたことがありますか？
 Q.5 情報処理学会に加入していますか？
 Q.5-1 加入している場合、その理由を教えてください。
 Q.5-2 加入していない場合、その理由を教えてください。
 Q.5-3 どういう条件が変われば、学会に加入したいと思いますか？
 Q.6 情報処理学会にどういうことを期待しますか？
 Q.7 情報処理学会に関してご意見がありましたら、何なりとお書きください。

表-1 アンケート内容

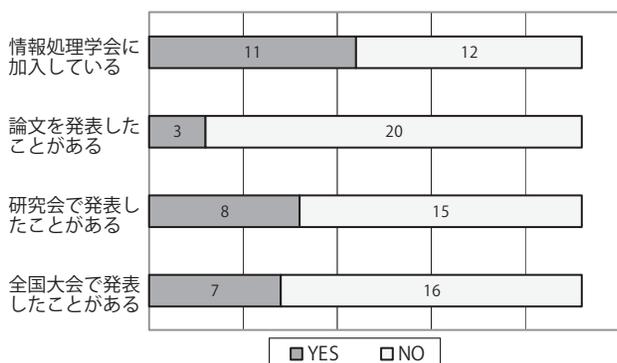


図-1 回答者プロフィール(全 23 人)

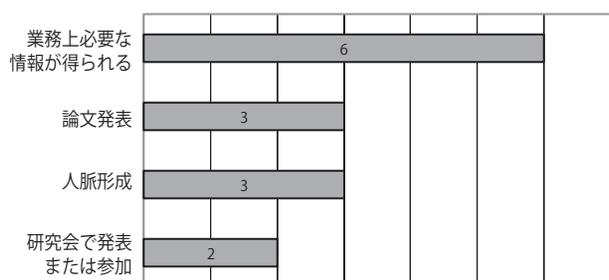


図-2 学会に加入している理由(全 11 人)
(Q.5-1 の回答より. 複数回答あり)

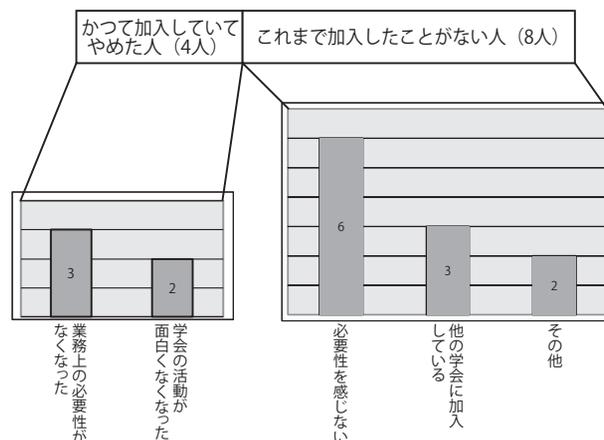


図-3 現在、学会に加入していない理由(全 12 人)
(Q.5-2 の回答より. 複数回答あり)

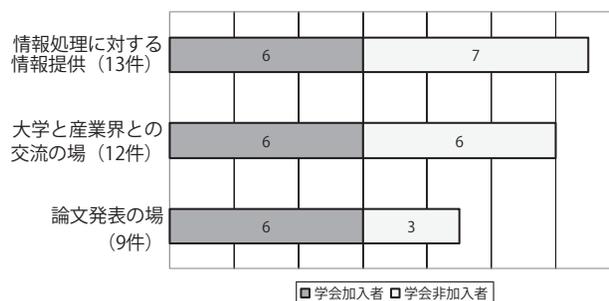


図-4 情報処理学会に対する期待
(Q.6 の回答より. 複数回答あり)

(1) 学会に加入するメリット

現在、学会に加入している人に対してその理由を回答してもらった。結果を図-2に示す。最も多い理由は「業務上必要な情報が得られる」で6名であり、次いで、論文発表、人脈形成などの理由が続く。企業の研究部門に配属された場合、学会発表を契機に学会に加入するケースが多い。その後、論文発表だけでなく、研究会参加、学会誌などを通じて、研究動向、技術動向あるいは新しいサービスのヒントなどを得ようとしている姿が想像される。

(2) なぜ学会に加入していないのか？

現在、学会に加入していない人に対して、その理由を尋ねた結果を図-3に示す。かつて学会に加入し、今は加入していない人が4人いるが、この回答のうち、3人がその理由を「業務上の必要性がなくなった」としている。これなどはある種当たり前で、研究開発のプロジェクトにいる間は成果発表の場として学会を捉えるが、そういうプロジェクトから外れた場合、「論文発表の場」としての学会の価値はなくなるわけである。私などは研究開発

の仕事から離れて長いから、論文あるいは研究会発表という動機から、情報収集に目的を移行しつつ継続している。

また、これまで加入したことがない人のうち、6人は「必要性を感じない」と答えている。この人たちにとって、学会は情報収集の場として有効だとは見られていないようである。

(3) 学会に期待すること

図-4に示すように、「情報処理学会にどういことを期待するか？」という問いに対し、「情報提供」、「交流の場」、「論文発表の場」が多かった。学会加入者に対する集計では、この3つの理由が同数(6件ずつ)、非加入者を含めると、「情報提供」、「交流の場」の割合がより増えるという結果になった。逆をいうと、非加入者を取り込んでいくためには、「情報提供」、「交流の場」を強化していく必要があるということになる。

これ以外の回答として、以下のようなものがある。

- ・ 産業界(実ビジネスの世界)から情報処理学会の活動がより認知されること
- ・ 情報処理技術者の地位確立に貢献

- ・共同研究などの推進母体
- ・大学と企業の連携のメリットが生まれるような仕組み作り
- ・論文誌、会誌だけでなく、メディアを通じた積極的な情報の開示

実務家のニーズに応えるには？

このような実務家のニーズに応えるにはどのような対応が必要であろうか？

学会に期待することとしては、「情報提供」、「交流の場」、「論文発表の場」が多いが、特に、実務家においては、前の2つ、つまり「情報提供」、「交流の場」に対するニーズが強いようである。

「情報提供」に関しては、「学会誌は読み物としてなかなか良い」というような意見ももらっており、既存メディアの内容よりもその露出の方に課題があると思われる。たとえば、学会のWebページ (<http://www.ipsj.or.jp/>) や BookPark (<http://www.bookpark.ne.jp/ipsj/>)^{☆2} などを通じて、さまざまなコンテンツが提供されているが、このようなサービスが会員には十分浸透していないようである。さらに、学会の会員以外に、こういう良質なコンテンツがあることを十分広報できていない。現在、論文誌等のオンライン化の検討を進めているが、これを契機に広報についても検討していく必要がある、と考える。また、広報という意味では、他の雑誌との連携も方策として考えられる。

「交流の場」というニーズに対しては、現在、ITフォーラムを推進しているところである。学会活動のベースは研究会にあるので、あくまでも研究会活動の中でより一層、大学、企業の交流が活性化していくことが最も望ましい姿である。さらに、情報処理技術者教育など研究分野横断の課題に対して、ITフォーラムの枠組みをうまく利用しながら取り組むことも有効であろう。研究分野内、研究分野横断、両面の交流を図っていくことができれば、と考える。

☆2 情報処理学会発行の出版物(会誌、論文誌、研究報告、欧文誌、英文誌)の創刊号から最新号まで、すべてのデータが掲載されている。

今後に向けて

学会のあり方に関してはさまざまな考え方があり、本稿で検討したような、研究者以外の企業技術者までを取り込んでいくことに関しては異論もあるかと思う。ただ、幅広く実務家までを対象としていくためには、このような対応が必要になってくると思われる。

本稿はあくまでも企業所属の会員の立場での意見であり、大学の皆様にとっては違和感のある学会の捉え方があるかもしれない。今後の情報処理学会のあり方を検討していく中で1つの可能性として捉えていただければ幸いである。

今回のアンケートのフリーコメントにおいて、今後の情報処理学会を心配する貴重な意見をいただいている。最後に、そのいくつかを紹介させていただきたい。

- ・「情報処理」という言葉自体に目新しさがなくなっている。プレゼンスをあげる工夫が必要。
- ・企業においてはますますビジネス志向が強くなり、企業の研究開発も基礎研究から応用研究がメインになってきている。そういう流れの中で企業の技術者の学会への関心が薄れている。
- ・学生時代には加入していたが、一度退会すると学会の活動に触れる機会もなくなる。積極的に情報発信をしていった方がいい。

参考文献

- 1) 阿草清滋：これからの情報処理学会：産学連携と情報処理学会，情報処理，Vol.48，No.1，pp.82-84 (Jan. 2007).
- 2) 佐々木元：我が国の情報通信技術の強化に向けて-会長就任にあたって-，情報処理，Vol.48，No.6，pp.547-548 (June 2007).
(平成19年7月9日受付)

玉置 政一 (正会員)
tamakim@nttdata.co.jp

1979年京都大学工学部電子工学科卒業。同年日本電信電話公社入社。横須賀電気通信研究所，その後，NTTデータ通信(株)(現在のNTTデータ)にて通信処理ソフトウェア，マルチメディア通信等の研究開発に従事。2006年10月より(株)NTTデータITマネジメント室長。